

研究課題 (テーマ)	女子大学生の HPV ワクチン接種の実態と子宮頸がん予防行動の関連要因の探索～子宮頸がん予防に関するヘルスリテラシー向上への支援構築に向けて～		
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学科	講師	北島 友香
研究結果の概要			
<p>【目的】</p> <p>子宮頸がんは、ヒトパピローマウイルス (HPV) ワクチンの接種で予防可能である。本邦では 2022 年にワクチン接種の積極的勧奨が再開し、定期接種を逃した女性を対象にキャッチアップ接種が行われた。今後の子宮頸がん予防には、キャッチアップ接種世代の子宮がん検診率の向上が求められている。本研究は、キャッチアップ接種の啓発活動が行われた A 大学において、女子大学生の HPV ワクチン接種および子宮がん検診受診の実態とその要因を明らかにすることを目的とした。</p> <p>【方法】</p> <p>A 大学に在籍中の 1997～2006 年度生まれの女子学生を対象に、無記名ウェブアンケート調査を実施。アンケートは、先行研究で報告のある予防接種の影響要因および WHO の予防接種の行動的・社会的促進要因フレームワークを基に作成し、基本属性、ワクチン接種状況、子宮頸がんや HPV ワクチンの情報源および印象、ワクチン接種の動機、子宮がん検診受診状況および今後の受診意向を調査した。分析は SPSS ver.30 を用い、有意水準は 5%未満とした。所属大学の倫理審査委員会の承認 (看護第 R6-24 号) を得て実施した。</p> <p>【結果】</p> <p>269 名を分析対象とした。HPV ワクチンの接種率は 85.5%であった。HPV ワクチン接種者における子宮頸がんおよび HPV ワクチンに関する情報源は、「自治体からの個別案内」、「親」、「大学の啓発ポスター」の順に多かった。ワクチン接種の動機は、「母親のすすめ」、「無料」、「自治体からの個別案内」の順に多かった。接種者は非接種者に比べ、ワクチンは「将来の自分の健康のために必要」と回答する者が有意に多く、非接種者は接種者に比べ子宮頸がんに対して「若い女性の罹患が多い」と認識する者が有意に少なかった。また、子宮がん検診対象の 20 歳以上の学生のうち、子宮がん検診の受診歴があるのは 22.1%であった。今後の子宮がん検診を「ぜひ受けようと思う」と回答したのは看護系所属の学生と子宮がん検診の受診歴がある者に多かった。</p> <p>【考察・結論】</p> <p>接種者の主な情報源や接種の動機は、学生の身近な環境で個別に訴えられていると感じられるものであった。ワクチン接種率は高かった一方で子宮がん検診率や受診意向は低く、子宮頸がんに関する情報を得ていても検診受診にはつながらない可能性がある。検診受診者は今後の受診意向を示していることから、まずは子宮がん検診に行く動機づくりの具体的な検討が必要である。</p>			
今後の展開			
<p>本研究結果より、HPV ワクチン接種には母親や自治体からの個別通知といった外的要因が影響していた一方で、がん検診受診には看護系所属であることや子宮頸がんに関する認識等の内的要因の影響が示唆された。今後はがん検診の受診率の向上に向けて、若年女性の特性をふまえたヘルスリテラシー向上、がん検診受診への動機付けの方法を検討しその効果を検証していく。</p>			